

女庭訓往来を読む(3) 解説

史料 「女庭訓往来倭文鑑」水無月(返信)

〔奥貫家文書No.3271〕

【用語(本文)】

・祇苑会 京都にある祇園社で行われている祭りを指す。祇園御霊会、祇園祭ともいい、京中の最大の祭りの一つである。明治以前は六月十四、十五日に行われてきた(明治以降は七月十七日から一週間)。祇園社は、慶応四(一八六八)年五月に社名を八坂神社と改称した。八坂神社(弥栄神社)と称する神社は全国に散在するが、いずれも主神に素戔嗚尊を祀り、八王子、稲田姫命等を合祀している。

・五十六代 清和天皇は、天安二(八五八)年に九歳で第五十六代天皇に即位した。貞観十一年は、八六九年を指す。この年は疫病が流行したため、退散のために神泉苑で六六本の鉾を立てて祭りを行った。これが祇園御霊会の始まりだといわれる。

・山城国 現在の京都府南部を指す。

・沙羯羅龍王 しゃかつらりゅうおう。しゃがらりゅうおうともいう。八大龍王の一。仏法の守護神。

・蘇民将来 そみんしょうらい。備後風土記によると、将来という兄弟の兄を指す。南海神の娘を訪れた武塔神が宿を求めていた時、宿を貸さなかった裕福な弟に対し、貧しい兄・蘇民将来は粟柄を座とし、粟飯でもてなしたという。後に鎮疫神として信仰され蘇民守という護符の由来となっている。

・供御 くご。ぐこ、くぎよともいう。お召し上がり物を意味する。

・眷属 けんぞく。血のつながりのあるもの。従者。

【用語(欄外)】

・牛頭天王 ごずてんのう。「祇園会細記」によると、須佐之男命(本資料欄外では素戔嗚尊と表記)のことを牛頭天王という。新羅で牛頭方にいたことによると伝えられる。

・公事根元 公事根源ともいう。一条兼良が著した室町中期の有職故実書で、宮中の一年間の公事や儀式の起源・沿革が記されている。

・武塔天神 ぶとうてんじん。むとうてんじんともいう。武塔神とも記される。祇園信仰と深い関係がある。備後国風土記の中では、須佐之男命(すさのおのみこと)と名乗り、茅の輪の由来に関する話に出てくる。

・巨旦将来 こたんしょうらい。二十二社註式に「巨旦将来」とあることから、このように記されることがある。将来と記されていることもある。当資料の欄外には「巨旦が弟の蘇民」とあるが、蘇民将来の弟と記されていることもある。

- ・はりさい女 頗梨采女。牛頭天王の正妻で沙羯羅龍王の娘。
- ・簞箕内伝 ほきないでん。安部晴明が編さんしたと伝えられる占いの実用書。
- ・奥儀抄 藤原清輔が著した平安後期の歌論。
- ・万葉考 賀茂真淵が著した江戸後期の万葉集の注釈書。

【関連する文書館収蔵資料等】

・ 田部井家1768 「御守」（蘇民将来）

「蘇民」と書かれた包み紙の中に、「蘇民将来子孫門舎」と書かれた護符（お守り）が入っています。どこの神社のものかは不明です。

護符は、須佐之男命（素戔嗚尊）を祀る神社で頒布され、厄除けの御利益があるとされていたといわれています。門口や鴨居に貼られたとされています。なお、護符の形状は扱っている神社によって様々です。例えば、埼玉県飯能市の竹寺では、木製六角柱の形をした蘇民将来の護符を扱っています。

・ 埼玉新聞社撮影戦後報道写真

S440630-015 「氷川さまの夏を告げる茅の輪くぐり」

S490630-001～008 他「茅の輪くぐり 大宮氷川神社」

S500630-001～012 「茅の輪くぐり 氷川神社 大宮市」

S510630-006～017 「無病息災を願う氷川神社の茅の輪くぐり 大宮市」

S520630-034～061 「茅の輪くぐり 大宮市氷川神社」



S520630-046

「茅の輪くぐり 大宮市氷川神社」

埼玉県内でも茅の輪を見ることが出来ます。写真は、当館収蔵の埼玉新聞社撮影戦後報道写真の一枚です。大宮市（現さいたま市）にある氷川神社を訪れた参拝客が茅の輪をくぐっています。撮影された6月30日は、氷川神社の「大祓式」が行われる日です。参拝客は無病息災を願って、神社を訪れ、茅の輪をくぐっていきます。イネ科の植物チガヤ（茅 ち）で作った輪をくぐり、無病息災を願う「茅の輪くぐり」は、例年6月中旬から7月はじめまでに設けられています。

【参考資料】

- ・ 武田祐吉編『風土記』、岩波書店、昭和12年
- ・ 『日本神名辞典』、神社新報社、平成6年
- ・ 白井永二、土岐昌訓編『神社辞典』、東京堂出版、昭和55年
- ・ 岡田荘司、笹生衛編『辞典 神社の歴史と祭り』、吉川弘文館、平成25年